

人間の成長を促すもの

望月 幸義

目次

- 一、序論
- 二、基本的方向
- 三、成長を促すもの
 - (一) 自己像の転換
 - (二) 見方・考え方の転換（精神の力）
 - (三) 偏見の克服
 - (四) 絶えざる向上の道
 - (五) 他者との交わりの中で

人間の成長を促すもの

すべての人間は向上心をもっている。これは自分の可能性を實現しようとする欲求であり、自己の人生を高め、完成しようとする欲求である。広池博士は人間は創造と進化を求めてやまない存在であり、事実、人類は精神的に進化してきているという。つまり、「最近科学の研究の結論は人間の精神も、肉体も、素と単純幼稚な状態から

今日の複雑な状態に進化したものであって」「(道徳科学の論文)⑧一九三、以下、頁のみ示す)、「学問、技術ないし道徳のごとき、幸福のごとき、みな進歩するものとなっております」(遺稿)などある。又、マスローによれば、人間は絶えず新しい人間へと変革を遂げ、より高い価値をもった人間へと発展していく存在である。マスローは性善説に立ち、人間は真・善・美にあこがれ、自らそれを創造しようとする意欲をもつという。

このような考え方は、多くの宗教者、思想家、教育者が抱いたものである。例えば、仏教の「万有ことごとく仏性あり」や最近の潜在能力開発の理論がある。また、シュプランガーは「教育愛は、成長する人間に与えられている可能性を愛するのである」(「教育者への道」一三四頁)と述べている。

人間の成長への傾向は、たとえ無意識的なものであってもすべての人がもっている。しかし、自分が自分の運命の責任者であるという自覚に立って、積極的に自己の運命の改善に立ち向かう人の進歩は着実なものがある。その中心となるのが精神(意識)の改革である。広池博士によれば、「世界諸聖人の事跡は明らかに精神力の無限にして且つ貴重なることを証明しておるのであります」(⑧三〇〇)。

本小論を進めるにあたり、私は以下の基本的前提を立てている。

- (1) 自己実現あるいは品性の向上がすべての人が求めている人生の共通の課題である。
- (2) 性善説——人間の本性は善である。神性ないし仏性の自覚が必要である。
- (3) 人間性は変化可能である。つまり宿命説ではなく、運命の改善が可能と考える。
- (4) 自己が自己の運命の責任者である。
- (5) 考え方(意識)の変革の問題である。

人生の根本問題が自己実現にあるが、これは教育の中心の問題であった。その際、以下のような問題が探求さ

れてきた。①遺伝(素質)か環境か。②知識(精神)の問題か、実践の問題か。③他者による教育の問題なのか、自己教育の問題なのか。④連続的成長なのか、非連続的成長なのか。

上記①—④の問題は、どちらか一方が正しいとは決めることのできないものであり、両者の影響によって人間の成長がもたらされているものといえよう。又、私は連続的成長が基本であり、成長がある量に達すると急激な変化として現れたり、真に変化したと感ぜられるものであると考えている。しかし、同時に我々は急激に変化しようという意識をもつことも重要である。「教育はつねに覚せいである」という意識である。以下、主として環境(教育)、精神(知識)、自己学習、連続的成長にウエイトを置いて考察することとしたい。

二、基本的方向

問題は人間の自己実現である。広池博士はラスキンの次の言葉を引用している。「自己の性の機能を徹底的に完成し、且つ自身とその所有物によって最も広有益な影響を他人の生に与えるものこそは最も富んだ人というべきだ」(⑧五八)。そしてここには方向があるといえる。もちろん、この方向を厳密に説き明かすことは困難である。そこには成長の段階の問題と質の問題が含まれているからである。しかし、自己実現の核心の部分に、人格の根本的变化の問題があることは確かである。この人格の根本的变化を示す言葉は数多くある。例えば、回心、改心、更生、生まれ変わり、悟り、コンヴァージョン、本来の実存、悔い改め、解脱、覚せい(目覚め)、真の自己の発見などである。ここには、以前の自分とは根本的に異なった人間になること、あるいは根本的に新しい世界を見出すことの意味が含まれている。これは人格の根本的改造ということができ、これは自分自身が生まれ変わったと感ぜることである。

マスローによれば、「この段階にあっては、学習の方式はこれまでとは全く異なった形をとるのである。自己のよりよい成長、環境の変化が、個人の人生観や生活目標、対人認知や自己認識のうえに急激な転換を迫り、新たな場の再体制化をもたらすといった人格全体の認知にみられる転換である。それは、あくまでも自己の内部からの全面的な変革であり、……ひとたび起れば、人格全体の根本的変革を喚び起こすものである。」(上田吉一「人間の完成」、六八頁)

これを私は一言で人間的世界から神的世界への移行と呼びたいと考える。キリスト教、仏教、儒教、イスラム教、ユダヤ教、神道などすべての偉大なる宗教、思想、教育は、人間が自己中心性を脱却して、神の心に到達すべきことを教え、その実現を目ざしている。

広池博士は人間と動物の根本的相違は神を認めるかどうかにあるとし、神を認め、神の意志を実現し、「人間を神格化する」(①五六)ことを目的としている。そこで、モラロジーならびに最高道徳において、神が中心になっていることはいうまでもない。例えば、「神様の信仰を道徳の大本としている」(「広池千九郎モラロジー選集」③一五)、「神と結びつかぬ最高道徳は人間の生活上究極のものではない」(遺稿)、「われわれ人間が今回新たに最高道徳的に救済せられ、いわゆる動物の境遇から神に近き真の人間に変化すること」(⑧一九四)、「人心を開発してこれを救済する事業は世界諸聖人のつとにこれを実現して自ら神となり、仏となり、もしくは聖人となって、功德を人類社会に樹立せられたところであります」(⑧一五二)などである。

すべての人間がこのことを、たとえ無意識的であっても、目ざしているとすれば、そこには無数の先人の体験、教えが存在しているだろう。いくつかの言葉を引用しておこう。「プラトンによれば、すべての人が目指すことの出来る理想は「神に似る」ことである」(⑤三九)、「人生の目的はただ一つ——神を知ること。神に近づく努力

をすること」(ラーマ・クリシュナ)、「皆さんの自然の中にある神的なもの、聖なるものが望んでいるような人間にならなければならないのです」(ベスタロッチ)。

広池千九郎は、このことを自我没却神意同化ということを示した。そして、人間にとつての真の位である天爵として、神、聖人、至誠慈悲の心をもった人をあげている。シュプランガーが「神の前で純粹であるべく努力すべきだ」(「教育者への道」、七一頁)と述べているのと同様に、広池博士は「神の前に有用な人間になること」を人間の目標としている。

以下に私が述べる、人間の成長を促すものも常にこの神と関連しているものであり、結局は神に至る道の探求になるだろう。人生の目的は自己を完成することであるが、これは神を見出し、神意を実現することと同じであるといつてもよい。

三、成長を促すもの

(一) 自己像の転換

神意を実現するための障害になっているのは、我々の自我である。自我の核心は自己の誤った考えと行いにある。我々は誤った自己像をもち、それによって自己を苦しめていることが多いのである。自己に対する考え方を変えることによって積極的人生観をもつことができ、自己の成長を促すことができる。マスローによれば、成長欲求の支配的な人においては、自己を価値づける基準は自己以外にないのである。又、ホルナイは、精神病は自分自身に対する関係の障害であり、自分自身に対して間違った態度をとっているという。

さらに、フォーリーは次のように述べている。「この「自己概念」を中心にして、諸々の概念が相互に体系づけ

られ、回転しているのが「自我（自己）体制」である。この「自己概念」は、いったん明確に規定され、暗黙のうち自分に受け入れると、自分の言動のすべてを一貫させる原理として機能し、心身の全体に浸透する。そのため、もしもこの自己概念の中身を変えなければならない場合は、たいへん本人が苦しむことになる。たとえ、その変更がその子本人にとってよいことであっても、苦痛が伴う」（「家族療法」、一五八頁）。自己に原因があることに気づくことが、人間の成長にとって極めて重要である。個人の精神上的の問題の治療にあたっているカウンセラーが一樣にいうことは、患者自身が自己の問題と解決法に気づき、その改善にむかって努力することが根本的となる。

人間の成長は、自己の概念を確立する歩みである。自己の概念の確立は自己の成長にとって重要であるが、同時に、この自己概念が自己の成長をストップさせている原因になっている。このことを水島恵一は「このように防衛機制は本来、危機に直面した生命体が、一時その欲求を犠牲にして自らを守ろうとするメカニズムであるが、これが強度におこると、その防衛的な構えが固定化して、本来的な自己の活動を抑圧したままの畏縮した生活が続いてしまうことになる」（「人間学」三四頁）と述べている。

更に、水島は、否定的な自己像が自己の成長をストップさせることについての諸研究について、次のようにまとめている。「一般に役割学習やレットテルの影響については、G・H・ミード（一九三四）、ニューカム（一九五〇）らの理論を参照。パースンズやスタインブロックは病者が病者としての役割を学習して行くことを重視し、サーピンはそれが生理的効果さえもつことを認めた。またアルマンら（一九六九）は異常そのものの客観的基準が絶対存在するのではないということから、むしろ「異常」というレットテルを貼る行為の社会心理学的探求、およびレットテルを貼られたものが、そのレットテルと自己概念の認知的不協和を解消すべく、レットテルによる役割

期待によって、レットテルにあう行動を強めていくことなどである。社会学的に一般化していえば、トーマスが、「もしあるひとが状況を真実であると決めれば、その状況は結果においても真実である」とみなした公理ともいっべきものがある。マートン（一九五七）はこれを「予言の自己成就」としてとらえ、アメリカの白人労働者が、人種差別を悪としながらも、黒人が組合組織を裏切る行為をするという予言（偏見）にもとづいて、黒人を組織からしめ出し、そのことが結果において、まさに黒人の裏切りという事実を成就させた例などを示している」（「人間学」、一六頁）。

これは自己による暗示ということが出来る。我々の精神は自由である。従って、自己に対する考え方は、自分で左右することができるのである。その意味で、我々は自分の運命を左右する主体なのである。ヒルは「多くの人は、一生自分をせまい牢獄に閉じこめたままで、その鍵をもっているのは自分自身だという事実気づいていない」（「自己実現」、一〇八頁）と述べている。

ところが、多くの人が否定的、消極的自己像をもっていると同時に、運命についても宿命と考えたり、自分の性格についても生得的なものと考えている人が多い。運命が宿命であるかどうか、性格が生得的なものかどうかについては、現在のところ確答はできないが、宿命であると考えたり、性格は生得的なものであると考えている人の方が、運命は変えることができる、性格は変えることができると考えている人に比べて、成長する度合が少くないといえる。従って、運命に対する考え方、性格に対する考え方が自己の成長を阻害している大きな原因になっているといわざるを得ない。我々の自己像も運命も性格も生活習慣も、それを変えようとする意志さえあれば変えることができる。もちろん、他人が自己像の変化を促す機縁になることは確かであり、教師やカウンセラーなどの役割もそこにある。

(二) 見方・考え方の転換（精神の力）

自己に対する考え方、自己像を変えることが根本であるが、このことと裏腹の関係にあるのが、物の見方、考え方、転換である。自己の人格的成長は、意識、考え方の進化であり、自己自身への囚われの考えから、より広い自己、神の意志により近い考え方になることである。

我々人間は、物に意味を与えることができる存在である。フッサールによれば、意識は志向性をもっており、物に意味や価値を付与する働きがあるという。しかし、我々の習慣となった意識作用は、物の否定的側面、暗い側面を見ることに向きやすい。例えば、「もし手綱なしに心を放置すれば、心は否定的な感情で一杯になってしまう」（『個を超えるパラダイム』二九四頁）。同様に、コーリン・ウィルソンも、我々は左脳を使用しすぎているために、物事の暗い面を見る心の習慣が出来あがっているという。

「やれうれしや、隣の倉が売れていく」という気持ちが一時的といってよいだろう。これは、現在の競争社会において、自己の確立が、他者との競争、対立の中で形成され、他者を否定して自己を確立しようとする傾向から生まれる面も大きいと考えられる。しかし、事物の暗い側面、否定的側面を見ることによって、自己は利益を得ていない。むしろ自己に対して害を及ぼしているのである。自分の見たいものを見たいという原理が働いているとすれば、周囲の環境の中に、周囲の人々の中に何を見るかが重大となる。広池博士によれば、他人が高慢に見えるのは自分が高慢であるからであるという。又、他人の欠点を見るよりも、長所を見るようにしなければならぬという。

何を見るかはこちらの精神の力による。単に見ることはかりでなく、我々の行動のすべてを精神が支配しているともいえる。モラロジ―は何といつても精神の力の偉大性を示した学問である。例えば、「信仰といい、道徳ともいい、事業というもその成否・大小共にその根本は人間の精神一つに存する」（⑥第二章第八項第四節中）、「事業の成否は一にこの重要な人間の精神の問題にあるを、従来は全く心づかざりしなり」（『広池千九郎語録』一七一）、「ことに全世界における成功者のごとき、無一物より身を起こしたるもの、古来幾億人ありともしれませぬが、その成功者はみなその人の精神力によるものであります」（⑧三七九）。

シュブランガーも次のように述べている。「精神がみずから情熱を生み出すということである。この世に、偉大なことが精神の担い手の心の奮起なしになしとげられたためしはないし、個人を超えた精神は、その個人の奮起から嵐のような力を受け取るのである」（『教育者への道』一四頁）。又、スワミ・ムクタナンドは「心を知ること―心の価値を知り、心の偉大さを知り、心の崇高さを知ることです。自分自身の心を完全に理解すれば、たんなる人間ではなく、自分自身が神となるのです」、「自分自身が変容し、それを人生の中心に据えることができれば、他の一切が変わります」、「人は必ず絶えず考えているものを獲得するのです」、「心はあらゆる災い、苦痛喜びの源なのです」（『個を超えるパラダイム』三九四―二九六頁）などと述べている。

我々人間は、常に自分は正しいという意識をもっている。この正しいという考え方の中に誤りが含まれているとしたらどうだろう。諸聖人は人間の自我（利己心）に囚われており、我々が根本的に誤っていることを指摘している。広池博士の最高道徳の発見は、精神作用の因果律の発見と深く関係しており、博士は自分自身のそれまでの精神作用に欠陥があることを深く自覚し、精神作用の改善を決意されたのである。

自己の誤りに気づくことが考え方を転換する基礎となる。これは聖徳太子の凡夫の自覚であり、ソクラテスの無知の知（自分が正しいことが分かっていないことの自覚）である。「自分が無知だと認めることができるようになる」と、自分がここに居ること、この建物がここに居ること、大洋がここに居ること、光景、音、匂いがここに

存在することがいかにすばらしいことかわかってきます」(「個を越えるパラダイム」、二四九頁)。広池博士は、上流階級の人々や成功者がかえって自分の精神作用の誤りに気づきづらいためであると指摘している。

(三) 偏見の克服

考え方の転換は自己の習慣化した考え方を克服することでもある。我々は多くの偏見に凝り固まっている。我々は何らかの考えをもたずには生きていけないから偏見の完全な克服は不可能である。偏見の反対は正しい考え方であるが、これは神の心、自然の法則であり、諸聖人の思想、道徳のうちに示されている。偏見の克服は、囚われからの解放、自己の超越ということもできる。マスローのいう自己実現した人間は自己を超越した人間であり、それは人間性のもつさまざまな法則、限界、苦悩、条件、極端、宿命からの解放を意味している。ジャック・コーンフィールドは、次のように述べている。「目覚めはじめることは、限られた個人的展望よりも大きな展望に立つて世界を見ることができるとを意味します。目覚めはじめるとは、自分が考えている自分自身と世界に関する知識を超越しうることに基づくことです」(「個を越えるパラダイム」、一三三頁)。

我々の偏見は大小さまざまなものから成っている。大きなものとしては、時間、空間、価値などを上げることができ。釈迦の空の思想は根本的偏見の克服を意図している。釈迦は人間の苦悩の原因を自己への執着にあるとしている。自己の存在と所有物が存在すると考えているから、悩み、苦悩が生じているのであるから、自己と自己の所有は存在しないと考えるようにするのである。

偏見の克服は、生と死、善と悪、自己と他者、美と醜……などのさまざまな二分法の克服である。例えば、ケン・ウィルバーは、このような二分法が人間の苦悩の原因であるとしている。特に、過去、現在、未来の時間の

区分は本来存在しないものであるという。我々は時間意識をもっているために、過去と未来の意識によって現在を苦境におとしめているという。つまり「あらゆる罪の意識は過去に迷い込んだ状態であり、あらゆる不安は未来に迷い込んだ状態だからだ」、「現在の瞬間を境界づけられた限られたものと感ずるのである。現在にせよはれ……」、「この瞬間には境界も制限もなく、永遠の喜びがあるだけだ」(「無境界」、一一四—一二四頁)。

そしてウィルバーは次のように述べている。「このように、リアリティが無境界であることを明らかにすることは、すべての争いが幻想であることを明らかにすることである。そして、この究極の理解こそがニルバーナ、モクシャ、解放、覚せい、悟りと呼ばれる対からの解放、分離という魅惑的なヴィジョンからの解放、幻想の境界の鎖からの解放である。これを理解したうえで、われわれはこれから一般に「統一意識」と呼ばれるこの無境界の自覚を探ることになる」(「無境界」、八一頁)。

偏見の克服とは自我の没却である。孔子は「意なく、必なく、固なく、我なし」と述べている。我々は自我を没却すれば、世界の見方が一変し、ものの本質を正しく客観的に見ることができるようになる。広池博士は、「実際に、改心は一つの新生命であって、それは一切の力を新しい方向に転換するものである」(⑤一一二)、「すなわち、コンヴァーシオンとは……悪より善へ、低い精神状態より高い精神状態へ意識的にしかも明白に変化すること」(⑤一一三)、「宗教的意味においては新生とは神霊の力によって魂を生命的に新たにすることであります」(⑤一一四)などと述べている。

(四) 絶えざる向上の道

考え方の転換、偏見の克服の過程は絶えざる自己超越の過程である。つまり、これまで自分が獲得してきた知

識、道徳性の現状に甘んずることなく、常に前進しなければならぬ。これは一生涯続けなければならぬ。人間は訓練を一つ一つ乗り越え、さまざまな経験を統合しつつ、真の自己を形成し、神聖なものに近づいていくのである。ボルノーによれば、「実存的運動をたえずあらたに開始させること、そのことがすでに、きわめて重要なことであり、疑いもなく、教育的な営みなのである」(『実存哲学と教育学』、二六頁)。「道徳科学の論文」には、「断えず向上して身を終えるまで努力す」(④三三六)、「終身わが心を磨きて」(④三六三)、「一長に誇らず心を虚しくして短を補う」(④三六二)とある。

成長は不断の変化によるものである。そのためには、変化を恐れてはならないし、精神的に柔軟になる必要がある。絶えざる自己訓練の道である。「大学」には、「まことに日に新たなれば、日々に新たにしてみれば、新たな日」(④二一九)とある。キリスト教についても、ボルノーは「このようなわけで、この見解は、たえず更新される努力の必要を説く点において、ふるいキリスト教の見解のルターの定式化、すなわち、「ふるきアダムは日々の悔い改めと懺悔に没頭しなければならぬ。そして、日々にあたらしい人間がよみがえらなければならぬ」というルターの定式化と、一致するところの見解である」と述べている(『実存哲学と教育学』、一八頁)。

このような形で、絶えざる自己変革の道を歩み始めたものは、そのことが一層よく理解でき、実践できるようになるだろう。それは、マスローがいう成長欲求中心の人格、つまり充実したエネルギーを外の対象に向け、成長へのステップにしようとする人であり、このような人格においては、人間性が飛躍的に拡大するのである。

しかし、人間の成長は簡単に成就できるものではない。それは年月のかかる道程であり、決して喜びばかりでなく、苦しみも多い道程である。古来から今日まで、禪、ヨガ、冥想、修行など、さまざまな精神開発の方法が考えられ、数え切れない人々が実践してきた。しかし、どの方法をとっても、困難な道であることに変わりない。

一時的に簡単な方法を見出し、自己が根本的に転換したように思っても、少し時間がたてば、それほど完全な境地に達しているのではないことが分かるのである。したがって、一般的には、人間の成長は、一步一步段階を踏んでの成長といえることができるであろう。

しかし、その一步、一步の歩みの中にも、喜びもまた存在しているのである。精神の修行に限らず、語学、スポーツ、芸道などの訓練においても、前進は一步、一步であり、現在到達した段階は理想の状態にはほど遠いとしても、向上しただけの喜びが存在するのが普通である。ゲーテは、「生のメタモルフォーゼは段階を踏んで完成されるものであり、これらの段階のそれぞれが神聖なものの表現だからである」と述べている。

時に、我々の成長が、段階的なものではなく、突然展望が開けたように思われる場合がある。しかし、これは厳密に言えば、一挙に生じたものではなく、日々の絶えざる努力が積み重なったものが、自分の意識においては急転回したもののように感じられるにすぎないのである。

事実はこのようなものであったとしても、一挙に変わるといふ意識をもつことも重要である。この意識をもつことによって、現在の自分の考え方を強く反省し、向上への意欲を高めることができると思えるからである。広池博士は「大善を行って一躍して聖位に登る」(④三四四)と述べている。

ここからは、本人の自覚による日常不断の向上が基盤になっていることが読み取れる。しかし、我々は一般に日常性に墮し、自分自身の現在の考え方を正しいものと考え、それを反省しようとしないう傾向をもっている。つまり、我々はなかなか積極的な成長への動機をもつにいたらないのである。

多くの場合、我々の人格転換が、疾病、経済上の困難、深刻な人間関係、事故に遭遇など、人生上の危機に直面して、それを克服する過程において生ずる。このような危機に直面して、我々はこれまでの自分の考え方や行

動の誤りや限界に気づき、新しい世界が開けるのである。

実存主義はこの点を強調したものである。つまり、実存主義者の目指すところは、非本来的実存に墮した人間を本来的実存へと取り戻すことにあるが、その契機となるものが危機的状況であるとしている。例えば、ヤスパースはそれを限界状況（偶然、病い、争い、死など）と呼び、限界状況において、人間は真の自己に目覚めるとする。また、ハイデガーは死を自覚して生きることが本来的実存にいたる道であるとしている。キルケゴールの不安やボルノーの危機もこのことと深く関係している。ボルノーによれば、「危機においては、つねに、正常な生活過程の攪乱が問題であること、かかる攪乱の特色は、突如として現れることと、なみはずれた強さを有することであるということ、かかる攪乱によって、生活の存続は、一般に、危険にさらされるようにみえること、そして、危機を通りぬけることによって、最後には、あたらしい均衡状態があらわれること、などである」（『実存哲学と教育学』、三九頁）。

人間は危機を突破することによってのみ、新しい生へ達することができるのであろうか。もし、そうであれば我々は自ら進んで危機を求めなくてはならないことになる。しかし、ここには疑問がある。つまり、危機に入ることによって、すべての人が人間性を向上させるとは限らないからである。むしろ現実には、危機に直面してますます苦悩することになる場合も多い。そこで一般には、自ら進んで危機に入るのではなく、危機は突如として降り懸かってくるのである。従って、我々は危機や限界状況が生ずるのを待つのではなく、日常生活の中で自己を向上させる方法を見い出さなければならない。

次に、我々の人間的成長は、単に自分の力だけで成就するものではない。自分の努力や経験には限界があるだろう。既に多くの先人、先輩が同じ道を歩み、大きな足跡を残している。そこで我々はそれらの師に学びつつ進むことが大切である。モラロジーでは、諸聖人の足跡を踏み、諸伝統の教えに従って進むのである。広池博士自身が神、聖人の教えに従って歩んでこられたのである。シュプランガーによれば、「しかし、人は世界の中で陶治的なものを一直線に探し求め、常に偉大な印象へ立ち帰り、偉大な巨匠に師事しなければならぬ。すべて偉大なものは、私たちがそれに気づくや否や陶冶する」（『ゲーテ』（二一四頁））。同様に、マスローは「もしも、人間の精神的成長、価値的成長、道徳的發達の可能性を知ろうとすれば、最も道徳的、倫理的な聖人を学ばばよいと私は言いたい」（『人間性の最高価値』七頁）と述べている。

広池博士は「そこで人心の救済ということは、学力・知力・金力もしくは権力等のごとき人間の力のみでは出来ぬので、全く神の力を借りるほかないと私は信じています」（⑧二六四）と述べている。

④ 他者との交わりの中で

先に人間の成長には、師や神が必要であると述べた。しかし、これはもつと広く解釈すべきものといえる。我々人間は他者との交わりの中で生きており、互いに影響し合って生きている。つまり我々の人間的成長も日常生活のさまざまな交わりの中で実現すべきものである。

人間的成長が自分の心の中に内的世界を建設することであるとしても、それは他者との交わりの中で成就するものと考えらるべきなのである。もちろん、一時的に山中で修行することも良いことであるが、生涯山中で暮らすということになると、その人間的成長の意味も薄くなり、単なる自己満足になりかねないだろう。自己の人間的成長が単に自分自身のためのものであったら、意味が薄くなる。自分が成長することは、同時に他人にとっても有益なものでなければならぬ。

シュプランガーはこのことを「文化の完成ということ、人間の完成ということ、この二つのものが共に教育のテーマであらねばならない。両者は決して分離されてはならないだろう」（『文化病理学』一四二頁）、「人類は協同してこそ真の人間になるものであり、各人はただ全体の中で自分を感じとる勇気をもってのみ心楽しく幸福でありうるという美しい感情が現われる」（一一五頁）と述べている。

人間性の向上のための努力は、本来現実のさまざまな問題を克服する過程で行われるものであり、孤独の中の思索によって行われるものではない。先に述べた神へ向かう過程は同時に全人類、生物全体を包括するものになる。日常生活における学びの過程は、理想的にいえば、あらゆる瞬間に可能でなければならぬ。我々の人間的成長は知情意全体の全人としての成長である。教育の目標も、知情意全体の統合された完全な人間の形成にある。そのためには、学ぶことが単なる読書による学びだけでは不十分である。そのためには、自分自身の中にある多様な潜在的な能力の開発に努めなければならない。つまり、日々の生活の中で、観察し、発見し、創造に努力することである。

その学びの中心となるべきものが道徳性の発達である。なぜならば、あらゆる知識、経験を統合するものは、個人の人生観、価値観、つまり道徳性であるからである。ソクラテスは「人間にとって大切なことは、単に生きるということではなく、善く生きるということである」と、またペスタロッチは「道徳的存在としてのわたしはわたし自身の作品である」と述べている。これは愛する力といいかえることもできる。シュプランガーによれば、「たましいの治療とは、人間としての真の自由と愛する能力との獲得を目標とする治療である」（『文化と教育』一三七頁）。

モラロジは、我々の生命を蘇生させることを目的としている。これは自己変革の意志を基盤にし、師の指導の下に、又、他者との交わりの中で、日々の活動を通して、日々新たに実践されていくものでなければならぬだろう。博士が、「キリスト教の帰着点は悔い改めて改心をなし、キリストが全人類の罪をあがなうために死せしことを感謝しつつ、その力に信頼して安心を得ることにある」（⑤一〇八）と書いていることを、我々は広池博士にならって実践していくのである。